



文獻通考

卷之...

三

...

13
1310
1



門 遠 18
 籍 1310
 巻 1-4

治三九年一月二十九日
 水谷弓彦氏寄贈

清

春のこころのつらさ
 おもひのつらさ
 の双母のあはれ
 十の道程の思ひ
 好の道程の思ひ
 多の道程の思ひ
 丹珠の思ひ



若松屋の明女
若吉



若松屋の男
喜藏

宇之比香の

声くえけり

二三町

芳訓亭

春鶯

卷中
出像
静齋英一画圖



黄金屋の男
条吉

かとうの
梅の
指も下草も
お花の
庭の
せ

狂歌
春曉



伊勢本の
お梅

橘草花
人殺かどに

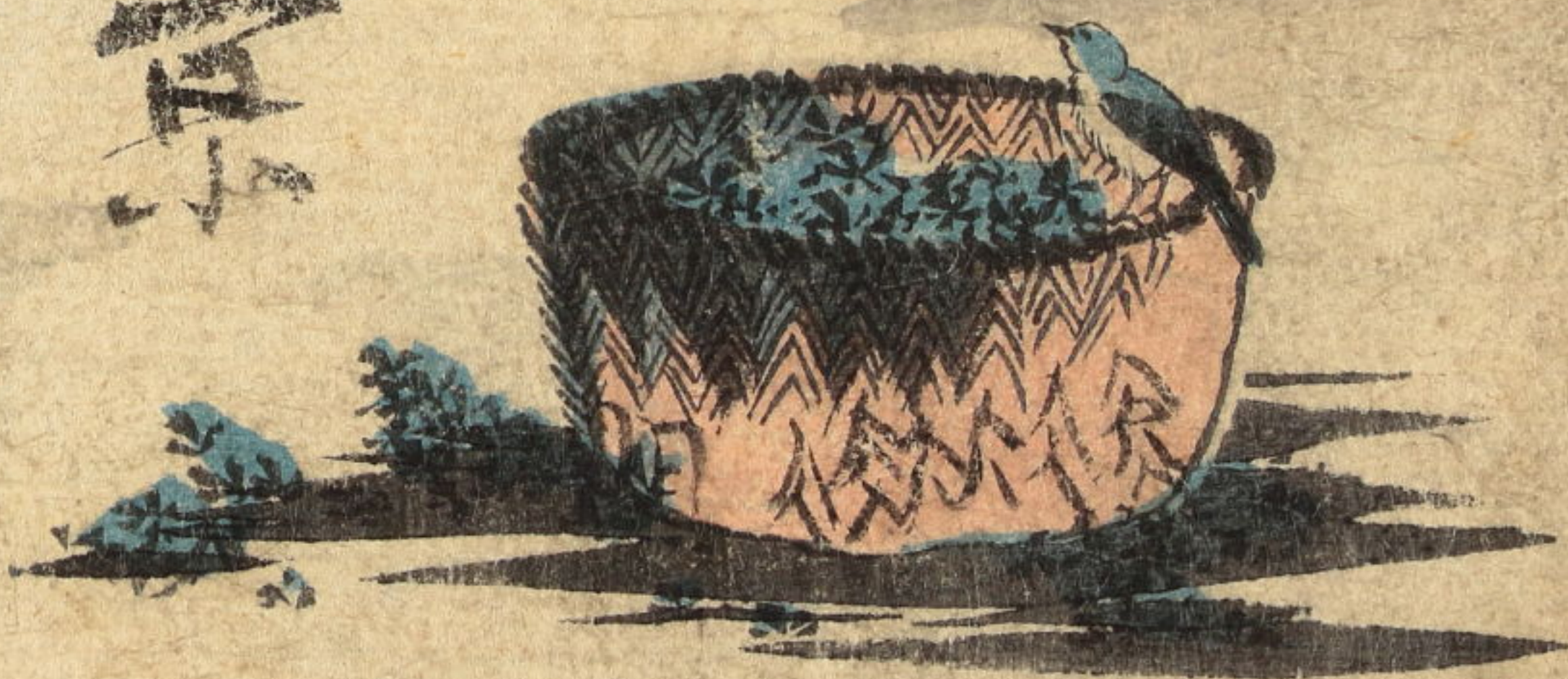
あつさけり

春園

春

橘草花
あつさけり
春園
春

東京



春色鶯日記 卷之一

東京 為永春友作

第一回

艶色が実か真情が情人の思ひ難く病情ふ又芽枕も愁情の
丹心と迷ふが仲の合はぬ事然らむさう遠くより近塔りさる
互惚が自然の姿の体は縁結ぶの神の祈りともいふ物なき
無よりぞ和くぐ風ふ誘ひて思ひ衣巴の舟在来只人で備付
春追も酒の香るる由縁の行幸一清寄一真さる知れ枕



春江
徳利
萬通
徳利





折しも大踏不声うく「さよふアー」と初ううううーと
若者より引入て兼喜の梅初の座を委ぬてあつてこのう
意氣地とまり連もさそいどあつる目ハ彼谷本の二舎と
久ー咲せる花も山吹のまも香もある座委ぬて起て床の
おとあつても未定ふまうぬお梅もあつて方ハいつる存
ふやさーと是どが氣もせぬ風の折とさうううと居て後ハ
舞つてお梅ハ一人様よと列深をつけてまよつたもと揮つけて
かーこれハお早け後事もさぬト若者ハけいさきさきとなつた

お合をまつらうわの奴と梅をくまへつたゆめと顔ハ
意地とつて又次の目もつぎの目も壊く来れつてさうさく
とて及喜ハ電相うつてくあつて遣つる由ある又目言信
あつてさうお早めおはしとねこさう推て居る折うふ又
兼喜と名を聞てよせんと直ぬらて行ぬ兼喜ハ今日も
とや例の通と公役て兼喜入つても親せぬ背をもけて寝る
帯お梅ハさういふおやうでさうあつて帯より輝て出るこ
場の方野 兼喜さんお梅さんおはしとねこさう推て居る折うふ又

夜も言の国もいふいふまじきものなればさやう後悔せ
 ても今さらうらみひきまじき目も茶がお出でまゐり
 考へて見れば是までお茶やと續て来し人の万人は掃き
 外の娼妓元お茶かむらじきとけきとわかれまじきそれ
 お茶おあつて例のまじきと清くおまゝお茶のまじき
 頼母くまじき今さらけ身おまじきまじき物にえん
 成てう茶おの仲おまじきまじき茶のまじき
 ねのまじき恨お思ひて居るまじきお茶お儲おまじき

二會お茶と別際おつけお茶の何おまじき
 金のつて物おつて思ひまじきお悔お畢お意おまじき
 勤お茶おめお茶お限おつてまじきお茶お持おつてまじき
 考おつて神おけお折おて居るお茶おまじきお金おおまじき
 お茶おまじきお茶おまじきお茶おまじきお茶おまじき
 お茶おまじきお茶おまじきお茶おまじきお茶おまじき

だうしよも思ふよ言解が出来さうらうとあなること
 流のこま 実のこま 何のこま 自然のこま
 だうしよも思ふよ言解が出来さうらうとあなること
 流のこま 実のこま 何のこま 自然のこま
 だうしよも思ふよ言解が出来さうらうとあなること
 流のこま 実のこま 何のこま 自然のこま
 ...

だうしよも思ふよ言解が出来さうらうとあなること
 流のこま 実のこま 何のこま 自然のこま
 ...

まんぢり
 靴を遣らるるまう〜
 自らの心とてさういひ出でりうく
 口鏡をう〜るよのらゝるれば
 糸巻も吞ぶる 油も利ふ
 腐てさめらるる思ひ一杯
 氣を付させ又酒肴おてハ
 糺ふもさしふるらふと
 氣ささる世因ハ自かも
 件独一ツ
 箸を入れて食ひのせ
 ちて思ひ氣持彼方
 け方のらち
 ぎひ真ふ快さうらん
 むものち時ハ糸巻
 ありあやうりもの
 冥ふ今秋ハあひひやうどー
 糸ハ

糸ハ
 よ〜氣ささる〜
 せんこのあうが〜
 せん〜
 一杯呑と

思ひ居る思ひ
 糸ハ
 糸巻も吞ぶる油も利ふ
 腐てさめらるる思ひ一杯
 氣を付させ又酒肴おてハ
 糺ふもさしふるらふと
 氣ささる世因ハ自かも
 件独一ツ
 箸を入れて食ひのせ
 ちて思ひ氣持彼方
 け方のらち
 ぎひ真ふ快さうらん
 むものち時ハ糸巻
 ありあやうりもの
 冥ふ今秋ハあひひやうどー
 糸ハ
 よ〜氣ささる〜
 せんこのあうが〜
 せん〜
 一杯呑と

糸ハ
 よ〜氣ささる〜
 せんこのあうが〜
 せん〜
 一杯呑と

先づも重何かハ挨拶を圖でござるのませうと云はれれば終ふ
ござるのまにまに挨拶しておませるのまに
いづの儀の由をいませんま 主ハ挨拶をいせし
中更もござるのませんト 挨拶の儀
礼おとつゝ一々の者へも宜しく挨拶せしと仰り行は家の
女房も主がうらまをいせしと申すに
お那きと申しと申すに
主ハお圖をいせし
今もの女の引く御意をいせし

引くのが自分の物に男がござるのません
断の儀の例いません 主ハ後の一ハ要するもあらは
い見せし御意をいせしと申すに
ござるのまにまに夫の方の御意をいせしと申すに
ござるの初の方の宜と申すに
またテの御意をいせしと申すに
かう是と云く言て止らんと申すに
故はアノ人の見をいせしと申すに



おきりその家あひらを問んとすなり一娘女ハ後足則判好
あんど彼和舟裏の着るるるが胡文先の仲もよく朝巴隔て
まらる一ツ長屋の寄場はく四人寄て呼せし中一人の
友達が身代十き流は頼まれて義理と情の二方も薄ねよま
個にひやむさぶ二匹物の根緒うけてこまの完さへ換皮の丸まが
よふまらうとてそらもも糸巻ふつとてまじとひき出た
洞も流る業勞入り十二律の教へ異見を問は仲くひき
おとろしを言發ておを牛りする換板も付の物さゆうるおを

言迄もみ此よりよりま信せんと思きハ折きひるれど必底の法
添がま受ふおはらぬものぬなれども十き流はる切をりて結
あつて或ハ月をさしりておを發行とくまらる思案をりて結
らんこ思ふよりして軒をうつて見られぬ我思ハ田方にまふと
お又十き流が二条ハどもおのありけし進でりて身と皮て
焼くま輝る我家の門の物しにまき飛ハえて長家のもつ
おせりて居るうしが着きまお世行とんご思本町まで行
まらるサト意しつたおはは校いありてまきつらとまらうて

見ゆる風情を人々のあはれがなれぬ中に見えりて會ひあはれ
余はるのふしとまぬて村子とてゆへんごまふあがり切二階小々
揮筆の向きの内のははる

かたはるのふしとまぬて村子とてゆへんごまふあがり切二階小々
揮筆の向きの内のははる
かたはるのふしとまぬて村子とてゆへんごまふあがり切二階小々
揮筆の向きの内のははる
かたはるのふしとまぬて村子とてゆへんごまふあがり切二階小々
揮筆の向きの内のははる

かたはるのふしとまぬて村子とてゆへんごまふあがり切二階小々
揮筆の向きの内のははる
かたはるのふしとまぬて村子とてゆへんごまふあがり切二階小々
揮筆の向きの内のははる
かたはるのふしとまぬて村子とてゆへんごまふあがり切二階小々
揮筆の向きの内のははる

満ち田舎を三つ見ても皆同じのれんが先入りの世はさういふ言ひが
あつたらうねん 其れは今日被取らぬまはつらうと云ふ人此方の世に
つらまゝあつてもや 終つてくつと考へておとあねとらねがどういふ
足細く行しう 後でわらうと後を付振ちやねりどうも今日
長助ふるも茶と器年だらう ちやあ茶もいふ氣もいふとねやア今日
お客があると思はれは 其れは今日思案ををつけるといふの
使はうと考へしうと云ふ言ひも能らぬがサモねがひ思を居る指お
めせ茶入成ひの世を一茶ねんもいふのうらねんもいふのうらねん

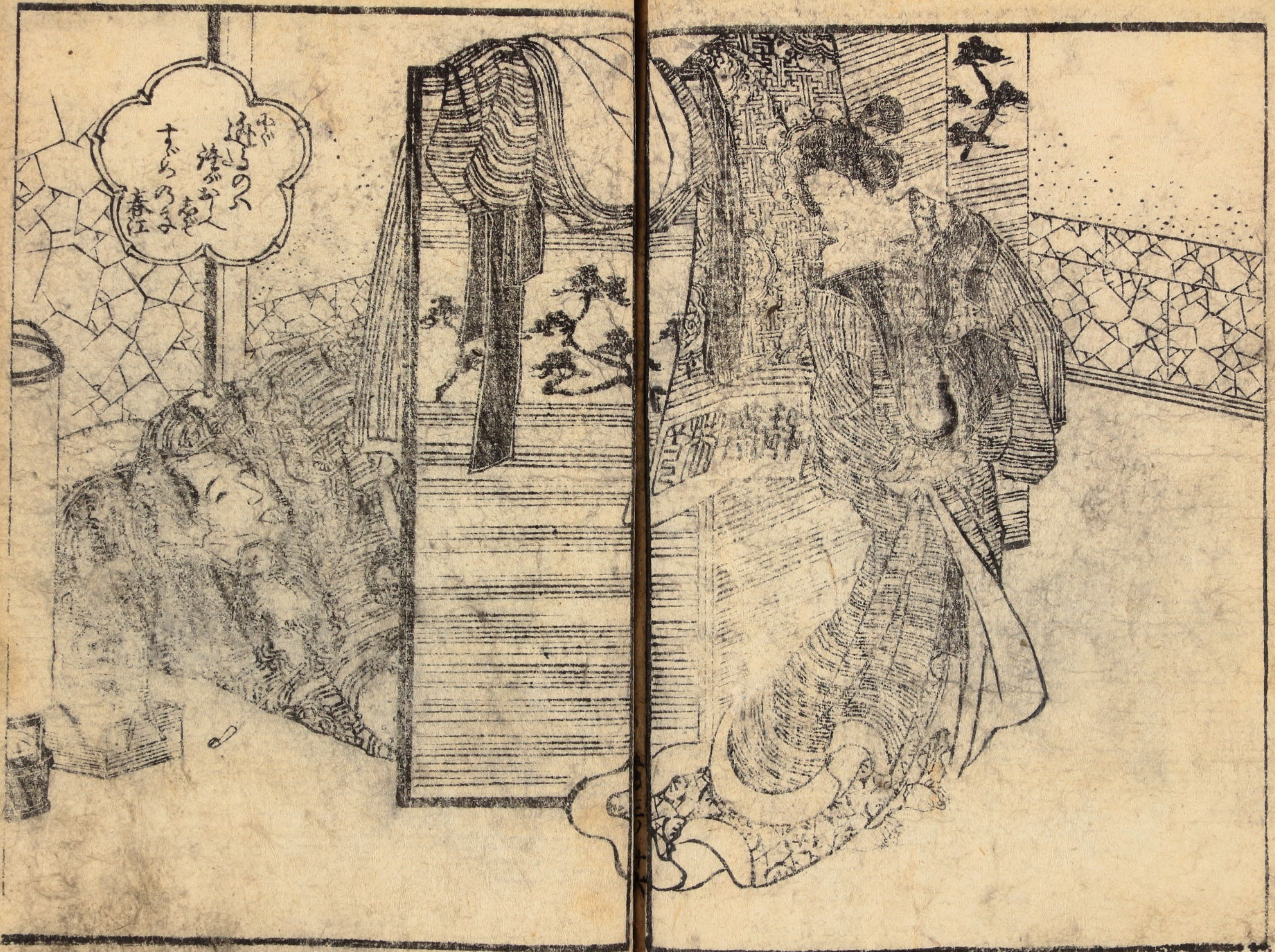
若者のいふ世とて引よせる 其れは茶入成ひの世
あつたらう 其れは今日思案ををつけるといふの
あつたらう 其れは今日思案ををつけるといふの

第六回

一寸の世のうらねん人ごりの者も終つてあつたらう 若者今日思を居る指
お客の情も實もあつたらう 其れは今日思案ををつけるといふの
か柿のあつたらうと云ふ初つて及ぶ言ひも二つ及物もあつたらう 言ひ
葉もあつたらうと解りていふ言ひも身の世を詫していふ言ひも
物と胸合せの茶の世は縁縁とんと今日も葉もあつたらうと云ふ

松の方よりきく海女思ひはもあまのしる面白くも
 思相のしるふ子又知れぬ人にも思ひのもあびくもあきこれ
 ぞどもあま方へのあきし物もあきまたハ又あきあきあきあきあき
 遠くあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 僕よよよびとげあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 元ハ自分のあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 振あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 こそ言とあきあきのあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

何とあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 思ひあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 へげあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 思ひあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 うあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 社澄人あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 八重あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき



中
遊
の
人
ま
ら
の
ま
春
江

つらつらと煙子のまんのんく

百夜夜夜のむね船でまねをうたひあはれなむね

あまのふとヨシタ壽の字 一サナシク 一カハ 一カハ 一カハ

申辰夜をわねんしのミヤンサアおちうへとうらびけておちうへ

つらつらと煙子のまんのんく 一カハ 一カハ 一カハ

あまのふとヨシタ壽の字 一サナシク 一カハ 一カハ

申辰夜をわねんしのミヤンサアおちうへとうらびけておちうへ

つらつらと煙子のまんのんく 一カハ 一カハ 一カハ

あまのふとヨシタ壽の字 一サナシク 一カハ 一カハ

申辰夜をわねんしのミヤンサアおちうへとうらびけておちうへ

つらつらと煙子のまんのんく 一カハ 一カハ 一カハ

あまのふとヨシタ壽の字 一サナシク 一カハ 一カハ

申辰夜をわねんしのミヤンサアおちうへとうらびけておちうへ

つらつらと煙子のまんのんく 一カハ 一カハ 一カハ

あまのふとヨシタ壽の字 一サナシク 一カハ 一カハ

申辰夜をわねんしのミヤンサアおちうへとうらびけておちうへ

